類義語アブナシとアヤフシについて：アフナシ・アウナシ・アブナシ・アヤフシの史的検討

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1998-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 光浩 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1431

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

類義語アブナシとアヤフシについて

——アフナシ・アウナシ・アブナシ・アヤフシの史的検討——

吉田光浩

はじめに

危(あやふ)きことを。あぶなしはよしと云り。浮雲とも書とかや。定家卿天福の伊勢物語にも。あぶな〳〵と云声をさゝれたり。

（片言　二）

この記述から、『片言』が刊行された一七世紀中頃には、少なくとも京都の市井において、既にアヤフシとアブナシが混用されていた状況を読み取ることができる。しかしながらその混同の経緯と各々の語史については、未だ不明の点が多い。

本稿では、この両者を類義語として捉えて、その史的展開について考察するものである。

一

アブナシとアヤフシについて述べるためには、まず、アブナシとアフナシ・アウナシの問題について、従来の説を整理

しておく必要がある。

アブナシは、濁音符表記が定着していない時代にアフナシと記されていたが、このアフナシについては、音価、語源を巡って、諸説みられるようである。例えば『名語記』に「アフナシトイヘル詞如何　安否無與　又アラハム　ナラセリノ反又アヤフム反セハ　アフ也　アヤフミナシノ義與」（巻第九　五七ウ）との検討があり、既に鎌倉時代の段階で、その語源意識はかなり曖昧なものとなっていたようである。時代を降って『源氏物語』の古注釈では、『河海抄』において「あふなしは無奥也おくふかゝらすあさ〳〵しき心也」（玉上琢也編『河海抄』角川書店）の注がみられ、現行の辞書もこのような源氏古注釈の解に従うものが多い。ところが「奥」の字音表記は、原則的に「アフ」ではなく「アウ」が正しい形とされているため、現行の注釈書では、次の記述に見られるように、古写本中のアフナシの表記を誤記（写）として、アウナシに改める場合が多い。

「奥なき」は、無分別・無思慮の意の形容詞。底本をはじめ証本の多くは「あふなき」と表記しているので、「危なき」と漢字を宛てて「あぶなき」と濁って読みやすいが「ふ」と「う」と音韻相通した仮名遣いの誤りと見るべきであろう。

（萩谷朴『紫式部日記全注釈』下203頁）

この点に関して、原田芳起「注釈の混態について『あふなあふな』と『おほなおほな』」（『平安時代文学語彙の研究』風間書房・昭和三七所収）には、『源氏物語』の古写本の表記がアフナシとなっている事実を重視されて、アフナシは原態であるとして、源氏古注釈から見られる「奥なし」語源説を否定された。

一方、河原寛「『あふなし』考」（『国語国文』四七―八）では、原田芳起氏の説を批判され、次のような「奥なし」説を支持する見解が示されている。

。原表記は仮名書きであり、「あふ」「あう」併用されたようだが、発音は長音化されず分節されていたのではないか。

。アフナシは「奥なし」より漸次和語化され、その意義の一部を担った「あぶなし」を分出するとともに、本義がうすれ、消えていったのではないか。

原田氏と河原氏の説は、源氏古注釈から伝えられる「奥無し」語源説を巡って鮮明な対立を見せているが、共通するところは古写本の多くにアフナシと記されている語と中世以降のアブナシとの関係については、積極的・消極的の違いはあるものの、一応認められているところである。

次に現行の辞典でのこの問題の扱いを見ておくことにする。前掲河原論文では、アフナシについて十一種類の近現代辞書の記述について検討されているが、ここでは、アフナシ・アウナシ・アブナシとアヤフシについて、その後出版されたものも含めて主な現行の辞典の記述に、どのような通説が採用されているかを概観しておきたい。

現行の古語辞典では、アフナシを見出し項目として採用せず、アウナシ（希にオウナシ）の項目を掲出する場合が多いようである。例えば、『日本国語大辞典』『角川古語大辞典』『岩波古語辞典』などがこれに該当する。

『日本国語大辞典』では、アフナシの見出し項目は見えず、オウナシの項目において、漢字見出し「奥無」を採用し、「（『奥がない』の意）深い考えがない。浅はかである。不用意である。軽率である」と記述されている。また、『角川古語大辞典』では、やはりアフナシは立項されておらず、アウナシの項目に、「奥無」の漢字見出しとオウナシの音注があり、次のような解説が見られる。

「あう」は「奥」の字音。奥行きがない、の意から、深い考えがないさま。思慮がない。軽率だ。また、うっかりしているさま。

また、『岩波古語辞典』では、アウナシの項目において、「《アウは「奥」の字音》深い考えがない」とされているが、「古写本には『あふなし』と書いてあるものが極めて多いので、『あぶなし（危）』と解く説もある」との注記も見られる。

また、これらと異なるのは『古語大辞典』（小学館）であり、アウナシはとりあえず立項されているものの、用例はなく、「《通説では『あう』を『奥』の字音とみて、深い思慮なく、軽率であるの意とするが、古写本の仮名は一致して『あふなし』であり、問題が残る》」との記述が見られ、アフナシの項では、原田芳起氏担当の語誌欄において「古写本の仮名表記は一致して『あふなし』であり、『奥無し』と解釈する説（細流抄）によって、『あうなし』と改められた跡がみられる。しかし、『あふなし』を原態と認めるのがよく、のちに濁音化して、中世以後の『あぶなし』となったものと考えられる」と記述されており、「奥無し」説を支持してアウナシを項目として採用する上記各辞典の記述とおおむね対立するものとなっているようである。

以上の辞書の記述をまとめると、アフナシ・アウナシについては、おおむね見出し語に古写本に見られるアフナシを採用せず、アウナシ（希にオウナシ）を立ててアウは「奥」の字音として「奥無し」の漢字見出しを採用するものが多い。また、その意味記述には、「思慮がない・軽率である・浅はかである」意を認めるものと考えられる。ただしこのような記述は、『角川古語大辞典』のオウナシの音表記にも見られるように、長音節化していなかったとする河原説とは異なり、源氏古注釈以来の見方を継承するものと考えられる。一方、『古語大辞典』では、原田芳起氏の担当により、アウナシを見出しとして立項せず、全面的に氏自らの説を採用したものとなっているようである。また、意味記述についても「軽率で危なっかしい」とされており、積極的に後代のアブナシとの繋がりを感じさせるものとなっている。

次にアブナシとアヤフシについて、同じく辞典による検討を行っておく。

『角川古語大辞典』ではアブナシとアヤフシについて、おのおの次のように記述されている。

。あぶな・し【危】

はたから見て危倶の感を抱くような対象のさま。他人の行動や物の状態が、安全性・確実性を欠いて不安定なさま。「あやふし」より後れて現れたらしい

。あやふ・し　アヤウシ【危】形ク

「あぶなし」より早くから用いられ、また「あぶなし」が、はたから見て不安に感ずる意に多く用いるのに対して、危険を自覚する意や、明確に危険が迫っている意をも表すが、次第に「あぶなし」に取って代わられた。（以下略）

この『角川古語大辞典』の記述がアブナシとアヤフシを対比的に見るとき、簡潔で正鵠を射たものとなっているようであるが、『岩波古語辞典』のアブナシの項に見られる「《無考えに行動して人に迷惑をかけそうだの意。類義語アヤフシは、周囲の状況から推察して、物事自身が壊れ、そこなわれそうだの意。中世以後アブナシ・アヤフシの意味は混同された》」という記述も見逃しがたい。

したがって、これらの記述から読みとりうるアヤフシとアブナシの相違は、アヤフシが自覚的な場合も含めて、予想される望ましくない事態に対しての不安・懸念・心配などを表し得ることに対して、アブナシは、対象の様子に対しての不安・懸念・心配を表すという点にあると言える。

二

アフナシが、アウナシの誤写であるのか、あるいはアブナシの濁音符無表記であるのか、という問題については、さまざまな角度から当時の音価を調査してゆく必要があり、一朝一夕に答えをだすことは難しい。また、アブナシ（アフナシ・アウナシ）とアヤフシとの関係はどのようであったのかという問題についても、明らかにされているとは言い難い。ここでは、これらの問題を明らかにするための一つの方法として、アフナシ・アウナシ・アブナシおよびアヤフシの表記がそれぞれ用いられた文献の史的調査を一括して行うことによって、この問題の解決の糸口を見出だしておきたいと思う。具体的には、以下のように、各々の語形の使用頻度および各々の間にみられる語義上の相違について調査することによ

表1

資料名	アウナシ	アフナシ	(アブナシ)	アヤフシ	備考
万葉集				*1	*「安夜抱可等」
伊勢物語		*1			*「あふなあふな」
土佐日記				1	
落窪物語				5	
かげろふ日記	*1			1	*「あはつけかり」等異同あり。
宇津保物語				3	
三宝絵				1	
枕草子				6	堺本に一例「あふなし」あり。
和泉式部日記				1	
紫式部日記		2			
源氏物語		8		*28	*名詞形「あやふさ」一例を含む。
夜の寝覚		3		*4	*名詞形「あやふさ」一例を含む。
狭衣物語	*1			8	*伝為明筆本・伝慈鎮筆本「あふなく」の異同あり。
今昔物語集					この他に、「危」による漢字表記二例あり。
大慈恩寺三蔵法師伝				2	この者に「危」による漢字表記四例あり。
古本説話集		1		1	

今鏡				1		
海人の刈藻		1		1		
方丈記				2		
発心集				5		
閑居友				1		
建礼門院右京太夫集（細川家本）		1				
正法眼蔵随聞記				3		
十訓抄				3		
唐物語				2		
十六夜日記				4		
沙石集（慶長十年古活字版）		3	1	5		この他に「危」による漢字表記七例あり。
中華若木詩抄（寛永十年版）			8			この他に「危」による漢字表記二例あり。
天草版平家物語			1	1		
きのふはけふの物語		3				
大蔵虎明本狂言			7	1		この他に「危」による漢字表記十例あり。
雑兵物語			2			

調査には、後掲参考文献中の各テキストを使用した。
数値直上の＊印は備考欄に注があることを示す。

り、アフナシ・アウナシ・アブナシそしてアヤフシの関係を把握するという方法を採用する。

表1は、古代から近世初期までの資料についてそれぞれの語の出現状況を調査したものである。表の作成にあたっては、可能なかぎり最善本とされる資料の影印もしくは校本によったが、活字本によったものについては、底本の原態として示されている表記を採用した。したがって、とりわけアフナシとアブナシという濁音符の有無については底本によってかなりの異同があるものと考えられるが、アフナシが（奥無）であって、アブナシの濁音無表記ではない可能性も考えられるため、ここでは一応区別しておいた。

これによると、既に原田氏によって言及されているように、正しいとされるアウナシ表記の例で、本文に問題のないものはほとんど見当たらず、むしろ誤写とされるアフナシの方が多く用いられているという事実を窺うことができる。もちろん現存する古写本は、中世以降のものがほとんどであり、また、アフナシかアブナシかという問題の解決のために、表1は、ほとんど資するところはないのであるが、アウナシが文献上においてほとんど現れず、アフナシが圧倒的に多くみられるということは、原田氏の説の通り、アウナシが正しくアフナシは誤写とする考え方自体に問題があるということであろう。多くの活字注釈本の表記に「奥無し」説を採用してアフナシをアウナシに改めているところをみると、果たして、その操作が正しいのかどうか、再考する必要があるものと考えられる。

一方、アヤフシについては、『万葉集』の巻一四東歌にその例と思われるものが見出だされる。

① あずの上に駒を繋ぎて安夜抱可等人妻子ろを息に吾がする　（万葉集　巻第一四　三五三九）

ここに見られる「危ほかど」は、「左野山に打つや斧音の遠かども（等抱可騰母）寝もとか子ろがおゆに見えつる」（万葉集　同　三四七三）に見られるものと同様の例と考えられ、「あやふけど」の東国訛として、従来解かれている。また、『日本書紀』にもアヤフシを宛てる古訓の例がいくつかみられる。

② 今賜二百済一合為二同国一。固存之策無二以過レ此。然縦賜合レ国。後世猶危（ナヲアヤウカラン）

（日本書紀　巻一七　継体天皇　六年壬辰）

書紀古訓のみをもって上代の確例とすることはできないが、万葉集の例も考え合わせると、現行の各辞書が認めるように、アヤフシは上代から既に危険な状態を表す語として用いられていたものと考えてよい。

また、『新撰字鏡（天治本）』には、

阽　余廉反平臨危又
　　識店反阿也不志

とあり、アヤフシは早くから既に漢字資料の字訓として用いられていた状況を推察することができる。

また、和文においても、アヤフシは、中古の比較的早い時期から会話・地・和歌を問わず、広く用いられている状況を窺い知ることができる。

③ 翁答へていはく、「天下のことは、とかりとも、かかりとも、御命のあやうきこそ、おほきなる障りなれば、〜」

（竹取物語）

④ 専ら風やまで、いや吹きに、いやたちに風波のあやふければ、

（土佐日記　二月五日）

⑤ 人妻に心あやなく掛橋のあやうき道は恋にぞ有ける

（後撰和歌集　巻第十　恋二）

したがって、アヤフシは、少なくとも中古の早い時期には、既に特定の文体・資料に大きく偏ることなく、主体・対象の危険な状態を表す語として一般的に用いられていたようであり、この様子は、次の例からも理解されるように中世にも大きく変わることはなかったようである。

⑥ 「〜長き夜すがら御寝もならず。御命もすでにあやうくこそ見えさせおはしませ」

（平家物語　巻第三）

⑦ 上の好に下は隨ふ間、世のあやうき事をかなしんで、心ある人は歎あへり。

（平家物語　巻第十二）

⑧ さきいづる花の都をふりすててかぜふく原のすゑぞあやうき

（平家物語　巻第五）

ただし、その用例数をみてゆくと中世末期から近世初期にかけて次第にアブナシ（アフナシ）の勢力が強くなっている様子を窺うことができるようである。

ところがアフナシ（アブナシ・アウナシ）については、上代には管見の限りでは用例が見られず、『伊勢物語』にみられる「あふなあふな」の例をアフナシの確認できる例と認めないとすると、[注1]中古中期の『紫式部日記』『源氏物語』あたりになって、ようやく現れはじめることになる。

⑨ もてつけ、おのずからしか好む所となりぬれば、艶なることどもをつくさん中に、何のあふなきいひすぐしをかはし侍らむ。

（紫式部日記）

⑩ 〈近江の君ガ〉いとさがなげに睨みて、張りゐたれば、わずらはしくて、（人々）「あふなきことやのたまひ出でん」とつきかはすに、

（源氏物語　まきばしら）

⑪ （右近）「〜かねて、かう、おはしますべしと承らましにも、いとかたじけなければ、たばかりきこえさせてましものを、あふなき御歩きにこそは」とあつかひきこゆ。

（源氏物語　浮舟）

⑫ （少将の尼）「あな、あさましや。などかくあふなきわざはせさせたまふ」

（源氏物語　てならひ）

⑬ うちひかれたる裾・袖口まで、いまから心にくく、なまめきたる気色し給て、いささか、いはけ、あふなきことまじらず、よいおとなのやうに、

（夜の寝覚　巻四）

⑭ 内の大臣殿は、まさこ君の、かくのみ召し籠められたるを、「幼きほどは、をのづから、あふなき有さまもや御覧ぜん。学問のかたも、笛も、いみじくととのへはててこそは、世にもまじろはせめ。〜」と思せど、

（夜の寝覚　巻四）

⑮ むかし、さばかりさべき人々にもうとまれ、いはれ奉りてうつろひし程など、あふなう、髪などをも、そぎやつしてましかば、

（夜の寝覚　巻五）

⑨から⑭についてはいずれも「考えなしで浅はかである」「軽率で不注意である」の意で解釈できる例である。中古のアフナシでは、この語義で用いられるものが多い。また、⑮については、これらとは異なり、「あっさりと・思い切って」の意で解される例と思われるが、時間をかけて熟考しない点で共通しており、派生義と考えられそうである。『岩波古語辞典』では、⑩⑫をアブナシの項目の「無考えで、迷惑をかけそうである」意の用例として扱われているが、まだ、アヤフシのもつ語義との間に隔たりが見られるようである。

一方、アヤフシについては、良くない事態が予想されて「不安である」「心配である」「危険だ」の意で用いられているようである。

⑯ 〈鼻ニ紅ヲツケタ源氏ヲ見テ〉（紫上）「うたてこそあらめ」とて、さもや染みつかむとあやぶく思ひたまへり。

（源氏物語　末摘花）

⑰　（女房）「あな腹々。今聞こえん」とて過ぎぬるに、からうじて出でたまふ。なほかかる歩きはかろがろしくあやふかりけりといよいよ思し懲りぬべし。

（源氏物語　うつせみ）

⑱　早舟といひて、さまことになむ構へたりければ、思ふ方の風さへ進みて、あやふきまで走り上りぬ。

（源氏物語　玉鬘）

⑯については、鼻に紅が染みつくという望ましくない事態に対する不安を表す意として、また、⑱は「危険が感じられる」意で、各々解釈可能であり、明らかにアフナシとは異なる例として考えられるが、⑰については、表現上⑪に近く、検討を要する例である。この場合には、「あやふかりけりといよいよ思し懲りぬべし」とあるように、過去の自分の行動を客体化して捉えた表現であり、アフナシがもつ「対象の行動などが見ていて軽率で不用意に思われる」意に極めて近くなっている。他の例から理解されるように中古のアヤフシとアフナシは基本的には語義の隔たりが見られるものの、この点において、すでにこの時点から後代の混同を招く要素を備えていたものと考えられる。

ところが、院政期以降の『古本説話集』と『海人の刈藻』あたりになると、アフナシの方に変化が起きているようである。両資料には、各々一例ずつアフナシとアヤフシが用いられているが、そこに見られるアフナシを、『源氏物語』『夜の寝覚』に見られるような、「浅はかである」「不注意である」の意として解釈することは、適切ではない。

⑲　わか君のやう〳〵おきかへりあふなき程に座りなどして物語し笑みなどし給ふにぞ、

（海人の刈藻）

⑳　とほくはなれまゐらせて往なん悲しさを思へども、するかたなし。あふなくおぼゆる方も、たのもしくなりぬさど、とほくなりまいらするぞ悲しかりける。

（古本説話集　巻下　第五四）

⑲は、若君の足許がおぼつかず「不安定である」意として解釈される例であり、⑳では中古の語義「軽率である」意で解釈も可能であるが、「先行きが不安である」意として解釈する方が一層適切であり、両例ともにアヤフシの語義に近くなっている様子をうかがうことができそうである。

一方、両資料に見られるアヤフシについては、中古以来の望ましくない事態に対しての不安・懸念を表す意として解釈可能な例であり、大きな変化は認められない。

㉑　大宮斎宮など故大納言のかやうにしめやかにあやしかりつるとおぼしめしあはせてあやうくのみおぼしめす。

（海人の刈藻）

㉒　この馬、（生き返ッテ）目を見上ぐるまゝに、頸をもたげて、起きむとしければ、やをら手をかけて起こし立てつ。嬉しきこと限りなし。「おくれたる人もぞ来る。ありつる男もぞ帰り来る」などあやふくおぼえければ、

（古本説話集　巻下　第五八）

したがって、アフナシとアヤフシの混同の兆しは、アフナシの語義がアヤフシに歩み寄るという形で、すでに院政鎌倉期の説話および擬古物語である『古本説話集』『海人の刈藻』あたりに見られることとなる。

本格的にアフナシが、意味上アヤフシと重なる例が見られるのは、次の『建礼門院右京太夫集』あたりからである。

㉓　いづれのとしやらむ五せちのほど内裏ちかき火の事ありてすでにあふなかりしかば南殿にえうまうけて

（細川家本建礼門院右京大夫集）

次の『慶長十年版沙石集』では、濁音表記アブナシと清音表記アフナシおよびアヤフシが同一資料中に混在しているが、いずれの間にも語義上の大きな隔りは認められない。

㉗　人ノ心オホクハ今生ノタノシミニホコリヌレバ、後生菩提ノツトメヲ、ワスルヽタクヒ、歎モアル時、世間ノ執著

モウスク、因果ノ道理ヲモ恐レ身アブナキ時ハ心オトロキテ一心菩提ノ道ニモ思入ヌヘシ　（沙石集　巻六）

㉘ 妻子ニムカヒ朋友ニトモナヒ、アソヒタハフルヽハ時刻ノスクルモシラレス、カヽル心サマフルマヒニテ、一定往生トウチカタムル人ハアフナクオホエ侍リ　（沙石集　巻九）

㉙ 例ノ病ニヨリテ河ヘオチ入ニケリアフナカリケル命カナトアサマシクオホエテ　（沙石集　巻三）

㉚ （早魃ノ折ニ知友ノ蛇カラノ使イニ対シテ、蛙ハ）カヽル時ナレハエマイラシトソ返事シケル、ケニモアフナキ見参也　（沙石集　巻五）

㉗アブナキと㉘のアフナキは、いずれも「不安定である、危険である」意で解釈ができる例であり、濁音語形と清音語形との間に語義の相違は見出だしがたい。したがって、単なる底本の表記上の問題と思われる。また、㉙㉚については、同じ『沙石集』に見られる次のようなアヤフシと置き換えても大きな違いは生じないものと考えられ、アブナシ（アフナシ）とアヤフシとの混同が進んでいる状態を窺うことができる。

㉛ コノ継母アマリニウレシク思ヒテ（中略）文ヲヤリケル「信濃ナル木曽路ニカクルマロ木ハシフミヽシトキハアヤウカリシヲ」　（沙石集　巻三）

㉜ 禄重ク家ユタカナレハ身アヤウク命ツヽマル　（沙石集　巻三）

これに続く『寛永十年版中華若木詩抄』(注3)では、すべて濁音形アブナシ（八例）となっており、またアヤフシは用いられていない。

㉝ 上竿奴ト云ハ〜日本ノ傀儡ナントト云モノノ心也。術ヲシテ人ニモノヲ乞フコト也。アブナイコト也

（中華若木詩抄　巻下）

㉞ 栄陽ニテハ。高祖ノアブナク見ヘタガ。ソコヲ。ヌケラレタ処デ。人皆驚也。

（中華若木詩抄　巻上）

ここに見られるアブナシは、すでにアヤフシと語義上の違いは認められない。

以上のことから、アブナシ（アフナシ）とアヤフシとの混同の過程が、おおむね読み取れるものと考えられる。すなわち、当初、不用意である・不注意であるの意で用いられたアフナシは、形態上では濁音表記が定着するに従ってアブナシと表記されるようになり、語義の上からは、不用意・不注意からもたらされる危険性へとその重点を移して行き、それがアヤフシのもつ語義と重なるようになって混同されるようになっていったものと考えられる。

三

以上文学作品を対象にアウナシ・アフナシ・アブナシ・アヤフシの用例の跡を辿ってきたが、伝本の成立自体、中世以降のものが大半である資料のみを対象として、表記上の問題に言及することは、きわめて不十分な態度といわざるを得ない。

そこで、ここでは、古辞書を中心とした検討を行い、アフナシ・アブナシそしてアヤフシの関係を明らかにしておきたい。もし、「奥なし」説が正しく、またアフナシではなくアウナシが正しい表記であるならば、古辞書類にその記述の断

片が見つかる可能性も考えられるからであり、また文学資料では知り得ないアフナシ・アブナシとアヤフシの関係を知る手掛かりがみつかるものと考えられるからである。

表2は、古代から近世初期までの主な古辞書について、アフナシ・アウナシ・アブナシおよびアヤフシの記述箇所を、できるだけ忠実に一覧にしたものである。やはりここでも、アウナシの記述は見出だすことができず、「奥無し」説を裏付ける記述も見られない。

アフナシ・アブナシの記述については、中古以前の資料には見えず、『温故知新書』の「抵（アフナシ）」にその例を見ることができる。「抵」の字義については、諸橋轍次編『大漢和辞典』によれば、「うつ」「おさへつける」「なげる」「やむ・うれへる」など動詞性のものはみられるが、「不注意」「危険」などの形容詞性のものはみられない。ところが、状態性の動詞「やむ」「うれへる」の意で用いられる「抵国（シコク）」の熟字の例がみられる。

○　前有萬乘之国、後有千乘之国、謂之抵国　（管子　国蓄）

この場合は、文脈上「抵国」を「危険な状態にある国家」の意で解釈される可能性もある。アヤウシなどはこの意で早くから用いられており、この時期にアヤフシとアブナシがすべて混用されていたとすれば、『温故知新書』において「抵」の字義と異なるアフナシの付訓を施したということも考えられる。

また、清濁の問題については、『温故知新書』は、原則として濁点が施されていない資料のため、（注4）先の『沙石集』などの濁音表記のあるものとないものとの混在を考え合わせると、この頃の「アフナシ」の音価は、実際にはアブナシであった可能性が高い。明らかにアブナシの記述が確認されるのは、一六世紀中頃の『前田家蔵古本下学集』の「阿夫無（アブナシ）」あたりからであり、これ以後、アフナシは見えなくなり節用集の類では「浮雲」の傍訓としてアブナシが宛てられるようになってゆく。ただし、この「浮雲」の傍訓は、『易林本節用集』『慶長十六年九月刊節用集』『合類節用集』など一部の節用集において「浮雲（アブナシ）」と誤って転写されていったようである。この事実は、後の『書言字考節用集』に「俗字」として掲

表2

資料名	アウナシ	アフナシ	アブナシ	アヤフシ	備考
天治本新撰字鏡				○阽（余廉反平臨危又識店阿也不志）	
観智院本類聚名義抄				○危（アヤフシ・タシナム・オトス・禾クキ）	上記は佛下末三○のもの。他にアヤウシまたはアヤフシの傍訓を付すもの一七字あり。
黒川本色葉字類抄				○危（魚為反アヤウシ）	
平他字類抄				○危（アヤウシ クキ）	
無刊記原形十行版聚分韻略				○危（不安アヤウシ也）	
文明辛丑版聚分韻略				○危（キ不安也アヤウシ）	
温故知新書		○抵（アフナシ）		○險忌（アヤウシ）	上記の他「危」に「同」の傍訓を付すものあり。
文明本節用集				○危（アヤウシ）	上記の他「危」「殆」にアヤウシまたはアヤフシの傍訓ある記述箇所あり。
静嘉堂文庫蔵運歩色葉集				○危（アヤウシ）	上記の他「三危」にミツノアヤウキの傍訓あり。
前田家蔵古本下学集			○阿夫無（アブナシ）		

天正十八年本節用集			○危（アヤウシ）	上記の他「殆」にアヤウカラマシの傍訓あり。
易林本節用集		○浮雲（アブトシ）	○危（アヤフシ）	
耶蘇会板落葉集			○危（あやうし）（き）	上記の他、「危」に「あやうし」の傍訓、三ヶ所にあり
日葡辞書	○Abunai ○Abunasa ○Abunǒ		○Ayauy ○Ayaù ○Ayausa	
慶長十六年九月刊節用集		○浮雲（アブトシ）	○危（アヤウシ）	
慶長壬子版聚分韻略			○危（キ）（アヤ□シ）（不安也）	
慶長版行書本節用集		○浮雲（あぶなし）	○危（あやうし）	
和漢通用集		○無益（なしあへ）（あぶなき也）		
合類節用集		○浮雲（アブトン）	○堵冕（タカクアヤウクシテ）（テツ）（ケツ）	
恵空編節用集大全		○浮雲（あぶなし）	○危（あやうし）	上記の他「阽」等、同訓を付したもの七字あり。
書言字考節用集		○雲踏（アブナシ）（俗字）浮雲（同） ○阽（マヤブム）（アブナシ）	○危（アヤウシ）	上記の他「殆」等「同訓」を付したもの二字あり。また「三危」に「アヤウキ」の傍訓あり。

出されていることや（表2参照）、前掲『片言』に「浮雲とも書とかや」と記述されていることを考え合わせると、アブナシについては、漢字表記としての「浮雲」が、あくまでも俗用のものであり、またこれ以外に特定の漢字に対して安定的に対応する字訓としては、後世に受け継がれて行かなかった状況を物語るものと考えられる。このことは、『観智院本類聚名義抄』の成立時期から、既にアヤフシ（アヤウシ）が「危」の訓として宛てられ、もちろん「阽」「殆」など他字の訓としても用いられているものの、その後も両者の間に安定的な訓と漢字との関係が保たれていた状況を考え合わせると、対照的であると言える。

おわりに

以上、文学資料と古辞書を対象とする調査をまとめると、①現行の辞典類が多く採用しているアウナシの表記例は、すでに指摘されていることではあるが、確実なものが、多くは見当たらず、アフナシがきわめて優勢に用いられていること、また、②アヤフシとアフナシ（アブナシ）との混同は、院政期あたりから見られ、それはアフナシがアヤフシの語義に歩み寄る形で始まったこと、③アヤフシは古代から幅広い資料・文体で用いられてきたこと、④アヤフシは「危」の字訓として安定的に用いられてきたが、アフナシあるいはアブナシは、安定的に対応する漢字の字訓としては用いられなかったことなどを読み取ることができる。したがって、早くから広範に用いられたアヤフシを、後発の俗語として位置付けられていたアブナシが次第に凌いでいったという関係も上記調査から窺うことができそうである。

（注1）「あふな〳〵思ひはすべしなぞへなく高き卑しき苦しかりけり」（伊勢物語　九三段）に見られる「アフナアフナ」は、定家の注する「アブナアブナ」か、『源氏物語』に見られる「オホナオホナ」と同じものか、という点を巡って議論されてきており、

未だ決着を見ない。ここでは重複形という特殊性もあるため、一応アフナシの用例からは除いておくことにする。

（注2）アヤフシには、中世にシク活用形態を生じるが、ここではこの問題について扱わない。

（注3）『古活字版（十七行本）中華若木詩抄』では、すべて濁音表記のないアフナシの例となっている。

（注4）『温故知新書』の濁点表記に関しては、中田祝夫・根上剛編『中世古辞書四種研究並びに総合索引』（風間書房）の「『温故知新書』解題」において、「蕤賓（ズイヒン）」「鉦（ドラ）」「戸樫立雑開（トヲハタトタテザツトアク）」の三例のみ例外として濁点（圏）が施されていることが指摘され、「これらの濁音は、後の記入かどうか、速断できない」とされている。

（参考文献）

福井久蔵編『国語学大系（方言一）第九巻』昭和一三年・国書刊行会
池田亀鑑編『源氏物語大成』昭和二八・中央公論社
田中重太郎編『校本枕草子』昭和二八・古典文庫
松尾聡・寺本直彦校注『日本古典文学大系落窪物語』昭和三二・岩波書店
東節夫・塚原鉄雄・前田金吾編『和泉式部日記総索引』昭和三四・武蔵野書院
河野多麻　校注『日本古典文学大系宇津保物語一～三』昭和三四年～三七・岩波書店
高木市之助他校注『日本古典文学大系平家物語』昭和三四・岩波書店
南波　浩　校注『日本古典全書竹取物語』昭和三五・朝日新聞社
奥村銀松『天正十八年本節用集』昭和三六・白帝社
原田芳起「注釈の混態について『あふなあふな』と『おほなおほな』」（『平安時代文学語彙の研究』）風間書房・昭和三七
佐伯梅友・伊牟田経久編『かげろふ日記総索引』昭和三八・風間書房
中田祝夫編『色葉字類抄研究並びに索引』昭和三九・風間書房
青木伶子編『（広本略本）方丈記総索引』昭和四〇・武蔵野書院
三谷栄一・関根慶子注『日本古典文学大系狭衣物語』昭和四〇・岩波書店
松村博司・山中裕　校注『日本古典文学大系栄花物語』昭和三九～四〇・岩波書店
丸山林平編『定本日本書紀中』昭和四一・講談社

京都大学文学部国語国文学研究室編　『新撰字鏡（増訂版）』昭和四二・臨川書店
築島　裕編『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究』昭和四二・東京大学出版会
中田祝夫編『古本節用集六種研究並びに総合索引』昭和四三・風間書房
中田祝夫編『抄物大系中華若木詩抄』昭和四三・勉誠社
玉上琢弥編『源氏物語評釈河海抄』昭和四三・角川書店
井狩正司編『建礼門院右京太夫集校本及び総索引』昭和四四・笠間書院
山内洋一郎編『古本説話集総索引』昭和四四・風間書房
中田祝夫編『文明本節用集研究並びに索引』昭和四五・風間書房
正宗敦夫校訂『類聚名義抄』風間書房・昭和四五年
中田祝夫編『中世古辞書四種研究並びに総合索引』昭和四六・風間書房
中田祝夫編『古本下学集研究並びに総合索引』昭和四六・風間書房
萩谷　朴著『紫式部日記全注釈』昭和四六・岩波書店
江口正弘編『十六夜日記校本及び総合索引』昭和四七・笠間書院
池田広司・北原保雄編『大蔵虎明本狂言集の研究本文編』昭和四七・表現社
北原保雄編『きのふはけふの物語』昭和四八・笠間書院
深井一郎編『雑兵物語研究と総索引』昭和四八・武蔵野書院
中田祝夫編『書言字考節用集研究並びに索引』昭和四八・風間書房
奥村三雄編『聚分韻略の研究』昭和四八・風間書房
池田利夫編『唐物語校本及び総索引』昭和四八・笠間書院
峰岸明編『閑居友本文及び総索引』昭和四九・笠間書院
平林文雄編『土佐日記本文及び索引』昭和五〇・白帝社
小島幸枝編『耶蘇会板落葉集総索引』昭和五三・笠間書院
河原寛「『あふなし』考」（『国語国文』四七―八）昭和五三
佐々木信綱編『校本万葉集』昭和五四・岩波書店

中田祝夫編『合類節用集研究並びに索引』昭和五四・勉誠社
中田祝夫編『印度本節用集和漢通用集他三種研究並びに総合索引』昭和五五年・勉誠社
深井一郎編『慶長十年古活字版沙石集総索引―影印編―』昭和五五・勉誠社
土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』昭和五五・岩波書店
小泉　弘・高橋信幸編『諸本対照三宝絵集成』昭和五五・笠間書院
田島毓堂・近藤洋子編『正法眼蔵随聞記語彙総索引』昭和五六・法蔵館
泉　基博編『十訓抄本および総索引』昭和五七・笠間書院
北野　克編『名語記』昭和五八・勉誠社
榊原邦彦・藤掛和美・塚原清編『今鏡本文及び総索引』昭和五九・笠間書院
高尾　稔・長嶋成雄編『発心集本文と索引』昭和六〇・清文堂
江口正弘編『天草版平家物語本文編』昭和六一・明治書院
高村元継編『校本夜の寝覚』昭和六一・明治書院
木村　晨編『平他字類抄本文と索引』平成三・笠間書院
関　恒廷編『海人の刈藻』平成三・右文書院

＊　引用に使用した例文は、読解の便を考慮して適宜改めたところがある。